

広範囲大腿骨外顆軟骨損傷に対し、骨釘による接合術を行った1例

○榎本 雄介(えのもと ゆうすけ) (MD)¹⁾, 中山 寛 (MD)¹⁾, 吉矢 晋一 (MD)¹⁾, 高島 孝之 (MD)²⁾

¹⁾ 兵庫医科大学 整形外科

²⁾ 高島整形外科

【はじめに】

今回、比較的まれな非接触外傷にて発生した広範囲大腿骨外顆軟骨損傷を経験したので報告する。

【症 例】

14歳男性、右膝痛。サッカー試合中、踏み込んだ際受傷。他院を受診したが水腫の軽減を認めず、受傷後1ヶ月で当科紹介となった。疼痛は軽度であったが、右膝に水腫を認めた。膝蓋骨不安定性や明らかなロッキング症状、不安定性は認めなかった。単純X線では異常所見を認めなかったが、MRIにて大腿骨外顆荷重部の軟骨全層欠損と顆間部前方に転位した遊離軟骨片を認めた。

【手術所見】

受傷後6週で手術を行った。まず、関節鏡で遊離軟骨片の存在を確認し、関節切開にて軟骨片を摘出した。2cm×1cm大の遊離軟骨片には骨性成分を認めなかった。母床部をドリリング後、骨釘を用いて遊離軟骨片を固定した。明らかな半月板損傷や靭帯損傷は認めなかった。

【術後経過】

術後4ヶ月で行ったMRIにおいて接合部の連続性は得られていた。現在術後7ヶ月であるが、愁訴なくサッカーへの競技復帰を果たしている。

【考 察】

若年者の大腿骨外顆軟骨損傷は比較的まれであるとされている。その受傷機転は非接触による捻転圧迫外力により起こるとされている。遊離軟骨片が大きい場合、早期に整復固定を行うことが推奨される。遊離軟骨片の固定材料は一般的には吸収ピンが用いられることが多いが、その合併症の報告も散見される。本症例では遊離軟骨片に骨性成分を認めなかったため、骨釘を用いた固定を行い、良好な成績が得られている。